



TITLE:

貝殻表面にフジツボ類あるいは石灰藻が付着した生きたハナマルユキダカラガイ(軟体動物門, 中腹足目, タカラガイ科)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. 貝殻表面にフジツボ類あるいは石灰藻が付着した生きたハナマルユキダカラガイ(軟体動物門, 中腹足目, タカラガイ科). 南紀生物 1997, 39(2): 125-126

ISSUE DATE:

1997-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/188258>

RIGHT:

© 南紀生物同好会

南紀生物, 39(2): 125-126, 1997

貝殻表面にフジツボ類あるいは石灰藻が付着した生きたハナマルユキダカラガイ (軟体動物門, 中腹足目, タカラガイ科)

久保田 信*

Shin KUBOTA: Living *Ravitronea caputserpentis* on which shell surface barnacles or calcareous algae attach (Mollusca, Mesogastropoda, Cypraeidae)

はじめに

タカラガイ類やウミウサギガイ類は、外套膜で貝殻の表面全体を包むため光沢のある滑層で被われ、貝殻表面はあたかも磨かれたようになっており、付着生物はみられない。ところが、生きたタカラガイ類やウミウサギガ

イ類の貝殻上に、フジツボ類あるいは石灰藻が付着した例が南日本の太平洋岸、特に和歌山県沿岸から報告されている(南紀生物編集部, 1971; 坂下, 1971; 江川, 1976a; 江川, 1976b; 宮脇・山口, 1977)。今回、和歌山県白浜町で、フジツボ類あるいは石灰藻の付着した2個体のハナマルユキダカラガイ *Ravitronea caputserpentis* (LINNAEUS) を採集した。これは、白浜町産のタカラガイ類では初めての記録であり、また、付着生物を生育させたこの種の種としては第3番目のものとなった。この新たな記録を報告するとともに、日本産タカラガイ類およびウミウサギガイ類へのフジツボ類と石灰藻の付着状況をまとめた。

貝殻上に付着生物が生育した生きたハナマルユキダカラガイ

記録1 (図1, 図2)

付着生物 貝殻背面の中央部付近に5個体のフジツボ類が群生(4個体へい死, 1個体は剝離脱落)

採集場所 和歌山県西牟婁郡白浜町臨海の塔島

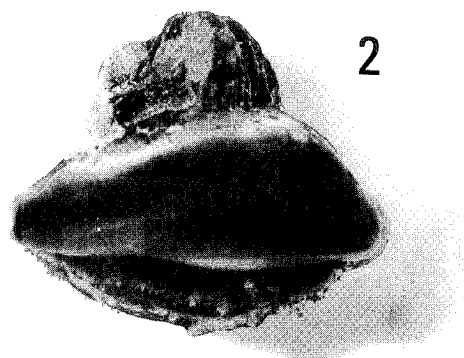
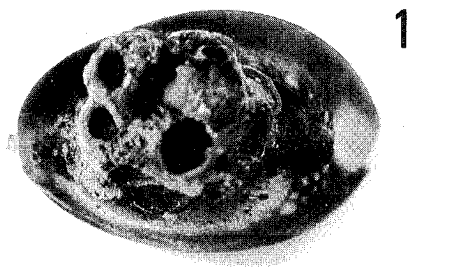


図1, 図2 5個体のフジツボ類が付着した生きたハナマルユキダカラガイ

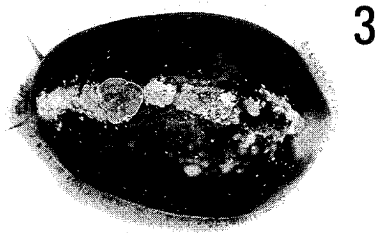


図3 石灰藻が付着した生きたハナマルユキダカラガイ

* 京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所 (〒649-22 和歌山県西牟婁郡白浜町臨海)

表1 付着生物が生育した生きたタカラガイ類およびウミウサギガイ類

| 種 (和名) | 採集 個体数 | 採集法 | 付着生物 (和名) | 付着生物 の個体数 | 採集地 | 文 献 |
|---------------|-----------|------------|----------------------|--------------|-------------|-----------------|
| ムラクモコダマウサギガイ* | 1 | 潜水採集 | サンカクフジツボ | 複数 | 白浜町塔島 | 南紀生物編集部 (1971) |
| ハナマルユキダカラガイ | 4 | 磯採集 | アカフジツボ, ?サンカクフジツボ | 複数? | 鹿児島県 野間岬 | 坂下 (1971) |
| ウミウサギガイ | 1 | エビ刺網 | タテジマフジツボ | 1 | 南部町茶屋 | 江川 (1976a) |
| ホシキヌタガイ | 1 | ?エビ刺網 | アカフジツボ | 3 | 南部町堺 | 江川 (1976b) |
| ヤクシマダカラガイ | 2 | 潜水・ 磯採集 | フジツボ類 | 複数 | 串本町有田** | 宮脇・山口 (1977) |
| ハナマルユキダカラガイ | 1 | 磯採集 | フジツボ類 | 5 | 白浜町塔島 | 本報告 |
| ハナマルユキダカラガイ | 1 | 磯採集 | 石灰藻 | — | 白浜町円月島 | 本報告 |

* 原著ではコダマウサギ (大谷・奥谷, 1989; 波部, 1973; 奥谷, 1986を参照)

** 石灰藻の付着したタカラガイ類の記録あり

水深 潮間帯
採集年月日 1994年2月26日

記録2 (図3)

付着生物 貝殻背面の頂端部に前端から後端にかけて石灰藻

採集場所 和歌山県西牟婁郡白浜町臨海の円月島

水深 潮間帯

採集年月日 1995年8月3日

上記のように、2個体のハナマルユキダカラガイとも貝殻背面中央部付近に付着生物が生育していた。この部分は貝の外套膜が両側から出会うところであるので、最も露出しやすい部分であり、付着生物の着生・成長がもっともおこりやすい部分ともなっているであろう。

過去の記録

はじめに述べたように、これまで日本からは和歌山県産と鹿児島県産のタカラガイ類やウミウサギ類でフジツボ類や石灰藻の付着例が報告されていた。これらの記録と本報告の2例の記録をまとめ、付着状況について表1に示した。その結果、少なくとも3種のフジツボ類が5種のタカラガイ類やウミウサギ類に付着していた。また、フジツボ類は複数個体が付着することが多い。世界で約200種が知られるタカラガイ類のうち、約40種が串本沿岸に産する (宮脇・山口, 1977) ので、今後也和歌山県をはじめ日本各地でこのような例が発見されてくると思われる。

謝 辞

貴重な文献をご教示下さった湊 宏、田名瀬英朋の両氏に深謝する。コダマウサギはムラクモコダマウサギガイであることをご教示下さった田名瀬英朋氏にさらに感謝する。

引 用 文 献

- 江川和文. 1976a: フジツボ類の着生したウミウサギ. 南紀生物, 18(2), 55.
- 江川和文. 1976b: ホシキヌタ二題. ちりぼたん, 6(5), 103-104, pl. 10.
- 波部忠重. 1973: 続原色日本貝類図鑑. 182 pp., 保育社, 大阪.
- 宮脇逸朗・山口正悟. 1977: 串本のタカラガイ. マリンバビリオン, 6(9), 2-3.
- 南紀生物編集部. 1971: 困ったコダマウサギ. 南紀生物, 13(1), 24.
- 大谷 豪・奥谷喬司. 1989: テンロクケボリガイ・コダマウサギガイ・ベニキヌツツミガイの産卵生態に関する2・3の知見. ちりぼたん, 20(3), 49-54.
- 奥谷喬司編著. 1986: 決定版生物大図鑑貝類. 399 pp., 世界文化社, 東京.
- 坂下泰典. 1971: ハナマルユキの受難. ちりぼたん, 6(5), 103-104.

南 紀 生 物

第39巻 第2号 別刷

Reprinted from
NANKISEIBUTU: The Nanki Biological Society

Vol. 39, No. 2

Nov. 1997